

「ふれあいの森」を中心に広がる森林づくり活動

— みんなで育てる「国民の森林」 —

愛知森林管理事務所

流域管理調整官 酒向 邦夫

NPO・穂の国森づくりの会

事務局長 原田 敏之

1 はじめに

愛知森林管理事務所の管理する国有林は、その多くが名古屋市や豊橋市をはじめとした都市部の近くに位置しています。こうした地理的条件に加え、近年の森林づくりに対する国民の関心の高まり、さらには、今年4月から小中学校において「総合的な学習の時間」が本格的に導入されることなどに伴い、当所へは、都市部の住民を中心とした下流域から、森林教室や森林づくり活動への参加等の要望が多く寄せられています。

当所では、国民に開かれた国有林を実践するため、こうしたニーズに積極的に応えることとし、小中学生から一般市民までを対象に、体験林業や自然観察会の開催に積極的に取り組んでおり、これら当所における開催回数は今年度既に35回に及び、延べ1,300人以上の市民が参加しています。また、自主的な森林づくり活動を行うボランティア団体等に国有林野をフィールドとして提供する「ふれあい森」については、現在、管内に4箇所設定しており、下流域住民を中心とした4つのボランティア団体等による植栽や下刈、除間伐等の活動が行われています。

今回は、その一つ、NPO・穂の国森づくりの会の「ふれあいの森」における、森林づくり活動について報告します。

2 経過説明

穂の国森づくりの会の「ふれあいの森」は、段戸国有林のほぼ中央に位置しており、区域面積は2.39ha。3年前にスギ、ヒノキの77年生の人工林を伐採した跡地です。

当所では、この場所が東三河流域を代表する河川である豊川の源流部であること、さらには、尾根を境に約130haの原生林に接していることなど、国民参加の森林づくりを推進する場所としてふさわしいことから、「ふれあいの森」に設定し、昨年5月応募のあった穂の国森づくりの会との間で、活動に関する協定を締結しました。



ふれあいの森の全景

3 実行内容

(1) 穂の国森づくりの会

穂の国森づくりの会は、東三河即ち豊川の流域をエリアとして、上下流の住民が協力して「森林づくり・地域づくり」を目指すこととし、下流域の豊橋市に事務所を置いて、平成9年に約1,000人の会員を集めて発足しました。以降、下流域住民を集めての体験林業や自然観察会を開催するとともに、講演会やシンポジウムの開催、政策提言としての報告書の発表等、多岐にわたる活動を続けており、平成12年にはNPO法人の認証を取得しました。そして、2005年には流域全体を挙げての催し、「穂の国森林祭」を開催することとし、官民の力を合わせて準備を進めています。また、自分たちの手で作るモデル森林づくりにも力を入れており、その新しいチャレンジとして、今回「ふれあいの森」での取り組みをスタートしました。

(2) みんなの森クラブの発足

当会では、この森を隣接する原生林をモデルとして、豊かな植生と保水能力を持つ、流域住民にとってのシンボリックな森に育て、多くの人に親しんで貰おうとの願いを込めて「穂の国・みんなの森」と名前を付けました。そして、「原生林を拓げよう」のスローガンを掲げて作業への参加を広く呼びかけたところ、約100人のメンバーが集まり、「穂の国みんなの森クラブ」が発足しました。



穂の国みんなの森クラブメンバー

当クラブでは、昨年5月の協定締結以降、週に2～3回のペースで、延べ63回、631人のメンバーが現地での作業に参加し、10月～11月の植栽に向けて、9月までは準備作業を行いました。

(3) 植栽にあたっての準備

準備作業は、歩道作設や地拵が中心ですが、このほかに現地全体を約200個の区画に分割して、それぞれの区画に地番を付けるパッチ張り作業、そして、各区画内に自生している目的樹種の稚樹の本数や分布を調査するとともに、モデルとなる隣の原生林の植生調査を行いました。植栽にあたっては、初期の植栽本数を1ha当たり1千本に設定し、苗木については、名古屋大学農学部教授の山本進一先生と立正大学地球環境科学部教授の渡辺定元先生のアドバイスを受けて、段戸の原生林と同じような遺伝子を持つ、現地周辺に自生している稚樹の山取の苗木や、現地周辺から採取した種子から育てた苗木、あるいは長野県南信地域から取り寄せた苗木に限定しました。そして、これらの植生調査や植栽履歴等の情報は、今後の活動に役立てるために、全てデータベースとして保存することとしました。

(4) 小学生による野外体験授業

この森林づくり活動は、当然、長期にわたる継続的なものとなることから、将来を担う次の世代に託していく必要があります。このため、殆どの植栽を子供達に行ってもらおうこととし、豊橋市内の小学校7校から5回に分けて5年生約400人を招く野外体験授業を開催しました。

そして、植栽の際には、自分が植えた木が後からでもわかるように、苗木の横に自分の名札を付けたり、植栽記録カードを同じものを2枚作成し、記念に1枚を持ち帰ってもらうなどの工夫をし、子供達には大いに喜んでもらい、沢山のお礼の手紙もいただきました。

なお、このイベントの実施にあたっては、愛知森林管理事務所が共催として、植栽指導のための職員派遣や道具の提供などを行い、また、他の森林ボランティア団体である、名古屋シティ・フォレスター倶楽部や中日森友隊からもスタッフの派遣を受けるなどボランティア団体間の連携も図りました。その結果、この野外体験授業は、愛知県の青少年健全育成モデル事業で優秀企画案に選定されました。



森林づくり活動は次の世代へ

(5) 民間企業や環境NPOと連携した活動

一方、この活動は民間企業が環境NPOと協力した記念イベントとも連携しています。それは、中部電力が創立50周年を記念して環境NPO・中部リサイクル運動市民の会を通じて消費者5千人に抽選でプレゼントする苗木券を、当選者の希望により「みんなの森」に寄付してもらうというものです。そして募集の結果700人もの人達から苗木券が寄せられ、11月には代表者70人が現地を訪れ植栽を行いました。

(6) 下流域受益者の参加

さらに、下流域で豊川用水を通じて水の供給を受けている農業者も森林づくり活動に参加しています。これは、JA豊橋の青年部からの申し出を受けて、現地の一部を農業者の手で育ててもらうもので、7月と10月には地拵と植栽とで延べ40人の農業者が作業を行いました。なお、この区画については、今後も継続的な保育活動を行ってもらうこととしています。

4 考察

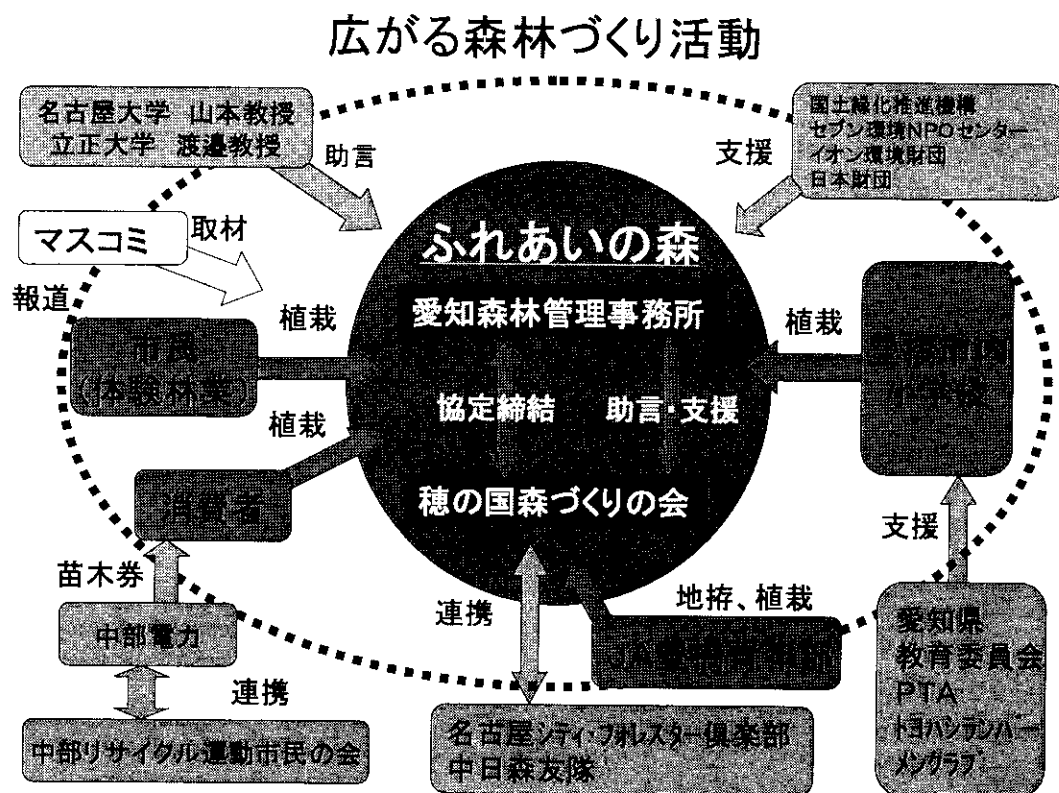
このようにして、この森における1年目の活動が進められてきましたが、この試みがねらい通りに行けば、隣接する原生林を保護するバッファゾーンとしての役割が期待できるとのことから、学術的な面からも大いに関心が寄せられています。

また、このような活動は、全国的にも意義ある取り組みであることから、国土緑化推進機構のほか3つの民間団体から支援を受けるとともに、NHK、テレビ愛知、中京テレビ、CBC、名古屋テレビ、中日

新聞、朝日新聞、読売新聞、静岡新聞などのマスコミ各社で大きく取り上げられ、その様子は広く一般に紹介されました。

下図のとおり「穂の国・みんなの森」では、愛知森林管理事務所と穂の国森づくりの会との協定による「ふれあいの森」を中心として、下流域の小学生や農業者、さらには、流域内外の多くの人々が森林づくり活動に参加しており、実際に昨年5月の協定以降この森へは既に延べ1,250人もの方が訪れています。

そして、この活動は民間企業や他のボランティア団体との連携、さらには、行政や民間団体、マスコミ等多くの人や組織によって支えられています。



5 おわりに

「穂の国森づくりの会」では、この活動を100年以上という長期にわたるものと想定し、今後さらに輪を広げて参加者を増やし、多くの人々の力を集めて継続的な活動基盤をつくり、この「穂の国・みんなの森」を育てることとしています。

愛知森林管理事務所としては、今後ともこれら国民参加の森林づくりを進める「ふれあいの森」の推進をはじめとして、森林教室の開催や地域イベントの参加等多彩な取組を通じ、開かれた国有林を実践していきたいと考えています。